



誄諧名家録  
全

5  
1871



門へ5  
號 1871  
卷



誹語名家録卷上



誹語の七一免八天の浮階のとき

あゝ 湯浴飛一 男神女神の詠歌

をり 詠れり

本川許六滑能言傳の詠り  
一 詠を

日本武言のにおまり 紅紙波の詠歌と

を一 免とん

ね永貞徳式  
見多り

たを飛世この

風士これとを一 免とん 凡日此とゆさう

云飛出せよ云はれいはいれ世二川をり

を一 免とん ねとま事ハらる福と未歌乃

詠り連歌の七一 ぬりを 誹語小ふ時ハ

未歌連歌乃を一 ぬりを 誹語小ふ時ハ

糸へは糸めをり 一 ぬりを 誹語小ふ時ハ

残流紀氏古今集了  
詠二首あり杜子美の作之  
子采と婦系と之とも  
詠句ともに荒本田吉武支那宗澄と  
死系と急系也

定家卿詠の句  
二首あり

此外一休禪師長明法師の句  
亦と之とも詠の祖たる  
善くせば

詠の字説多しと之とも  
紀氏杜氏

ともに詠の字と判れあり  
後世乃  
詠士許六支考の崇り  
詠と之とも  
芭蕉公羽生系を詠の字と用ひら  
これ一例也

詠の連歌と書事連歌と  
二句一首のはき  
詠句とも詠百員あり  
詠の連歌と之の字  
を加ふ古式なり

芭蕉公羽奥城系墳墓の北江州粟津

義仲寺朝日將軍木曾殿の古塔

藤まゝり遺言ありては縁と生衣を敬ふ

〜〜家獨歩の誹諧此公羽りては家事を

志願魚向井太末の説  
家了略也

短歌行長哥行蓮二坊支考式を

定むと之とも誹諧の式ハ世ととの相承

貞徳の法集不定とて何ぞ後人乃

私を用ひるべき

已十四ハ五十員の式ありては世に

ありて七十二候ハ百員の式ありては

は家との形りありて其日乃二席あり

志願の形りありては家をもとては

○守武

勢州内宮長官三位荒木田氏天正十二年  
八月八日卒ス今守治橋ノ尾守武社  
有り是神ありの地あり

夢想獨吟十句巻頭

飛梅やうはくも神の表

獨吟十句たを我立経ひては

洛周桂連歌の一  
宗直也式のほととを以ては

やと問我こきまらえに此友の十句

かて式とありては

形家事此級めて急る魚

え日や神代的事も

菩提山ありては

女華と南無阿弥陀佛と夕亦

五柳の眉の〜家の柳

終令の曉

草花のまふいふもん 一畝世の雨

群世の和音

うらも亦仍末も神徳山

家のねん

世の中百真巻の和音 百真の

世の中は親く存るる人々

何うはまともれさき

和句

くはむむ〜ゆらまも信やある後

沈ぬ人より七月二日の卒

牛〜もねはまねきハ結の飯

そよやらち三花のままさう

そよの飯前句のうまきはま〜

用能人とあはら〜和とそよと月二川と

ちんちん

和音の逸人連音の達者誅諧

たぬ〜祖と和を

宗鑑

梅沢尼が濟乃佳支那赤三席入道  
〜〜後う同回山倚り佳を誅諧  
大筑波集の撰者あり

一日人〜誅諧ふ〜終を回

濁〜をハ佛ありはし庭の著我

守武々飛夜とりも〜と〜て久〜死

紅波句あり

元日花見のよみせん見二のよ

天神を極すまゝ多る毎し歌

よとはんし秋中あえり陸

し日里人あゝ回ふむの身もを呪咀

得たせをゆきや

大玉の國もたそれ思田むし

此句をゆりたはるゝ田のまにに

多きも田むし一善く失小きと

取句 宇氏の取句あり

其の取句 懸懸海乃始り

先は久く一誇をそまふ

さし融れぬとこあり商人

またも月とさふ計せり

山崎村庵の額

上客ハ一日あり

中客ハ一日あり

下客ハ二夜あり

連寄の連寄者誰かあるはつ續いて

唐の魚りに作歌多かりんをり能書

孔子氏其多る時をあるをり 彌南記作と

休しうを唐中に頼りともて一日は

禮を修へん戸をゆく 飯屋の飯小能と

多るを久風流の語さあり

殿下の後也——牡丹あり澤あり水鏡を  
世人能く知るるものあり略す

天正八年五月卯方三ノ辰成——流  
石人法を隠す者の類り里人を度天狗  
ハ形を——汝と山中あり足あり——

源系未詳

○負徳

松永能九郎初名長政磨入道——  
道遠軒負徳亦兼安徳と号し卯年  
九十七歳有相実相院——葬

父永種の道とは身奇道小女——九條  
孫山公の奥儀と傳授家後流儀小たわ  
孫流儀を——作有——寛永二年書月  
二日洛中門与妙濃坊——たわ——始免く

誹謔の久きをと飛——久式を巖二里  
多——と

主 山本 西武

執筆 須賀庄次郎

関白秀吉公流連秋の時流席執事  
御筆及撰集多——

洛書肆井筒を故に在洛此翁は下  
負徳命——とある——定む

流筆ハ流儀式あり小書り連二奇り

七句左の——流を又句左に定又句左の物を

三句左に——定む三句左に——と二句左に

定むあり

雙林寺あり

涼風やこれも花と月のさよめ

昔はとては乃は真室これと取ればとえ  
そは貞如く譲る貞如の時ふりて  
破れ多ると不詳今や阿はは丸をよふ  
も所り此公舟乃任給飛し遠とや

一房合はる秋風葉のこころ

風皇も出ははとまに因のこころ

月やあはれと喜やむうは因のこころ

聯句

さい白な雪ハ港尾の夜もとこ

多く思くと梅一登の系

下 甘夏の目くゆく行をくははと

新 露のこころをりゆり葉を平

と葉のえと作はるまにハ宮元元年ゆや

板倉固防も殿は勅及の席二條乃

御城小たわく作はるまに地新ハ大佛乃

側り給てしけり二廊乃左小掃は本

右子橋の市と花しと極もりはて貞依

老人一歴を卷るる乃句と忠やれは語く

二廊りくけ化者乃名をとるは

極ちやうりあはる葉まの非を母

年は矣ハ級の座りぬふまり

宮大を川の氷舟中の久きこと事







心持のほきし旅路の報給り敬言

此三句と得し生誕事書換多氣句吳紙  
経舟自らの賞云々焼換まるとなり故下自筆の  
句世より稀形事子吟此三句と得しはの言  
吟一自より既世とけあり一免由事と  
とせしき一とと

曙の歳意り一にしま乃山

後冷泉院乃は時春内家曙の画一障せよと  
初阿事一には多る句なり白紙の障り一雲  
が一に清墨云乃並毛二門に書多る画  
形る一

道行時も彼の既世一面大我書紙の花  
物ありお故おまと名付百景と一在ひ一  
人形り花の賦あり家に回る

このころ中形人形より免角二と執と和せ

送り火ハ法所の多免う大文字

此句一免大文字と云一故形り二と執の事

一のえ

甚難や日まきにほましく無所ま一を執

貞室が一は免形一またる言形し故ありとと

はと等の物言も風雅の一川形る也一

たも一はとと神も眼くや日の始

仍月をほし一海島するせり

良徳 羅冠井氏示不佳貞徳門人取

石川美や有る人全流元

卒著一尺の涼き障二尺も

世一三婦貞徳六才

西武三圃維舟貞室安靜良徳

此六士より道極く一にこの家あり

○望一

勢州山田住杉木氏古き誹諧ノ名有  
盲人ナリ大森守武宗鑑ヲ學ブ

たのほくらひるをまやをたけし

去年よりもろや一三あり今新異

を連と夕之良舟もけけきん

二大神を洞指吟

梅あり南流板と北壁とけ

と飛く久井次乃流ををね

長はふるの光るるの鏡のねと

○梅盛

三浦氏より伝心子と貞貞徳末の  
門人傳り伝ス撰集多ク

万葉や舞も咽ふも旅の事

さゆりきと人やつるは流詠の歌

木魂千句巻既

一葉一本思ふに三あり千程ふ

外山のあはれは雪迎ま

いぬの居も入目の乳もたし



あり乃母や火鹿のくはるも

○ 玄札

成田氏江都小住久一医師小一  
誅語ノ判者ナリ

に十二の年を在りて

ちり後之よりハ茶原十二非

○ 未得

石田氏に在る佳久判者ナリ

茶子やり小のちちるちり佳

○ 慶友

泉州坂の判者ナリ

一葉ハ先相をとりて

徳え玄札未得慶友此に人の何事も同時

の判者徳えり飛と久牡丹花を人

と徳と

玄札未得と公多るる

世に中へは、ぬここの連のちり

心り〜こころ入りきむれ

世に中へは、ぬここの連のちり

ありと〜門本の母をまひ友慶友

ありと〜門本の母をまひ友慶友

○ 兼如

隆興山石塔の産に在りて  
岩城兼如と名宗

有りははのちちるちり

ありと〜門本の母をまひ友慶友

隆く其れ思母之弟如くはそむれり

多く其れ人乃て逃れんとすま

と其書し多しとて字はしめり

けそそまとのこの字より隔りとうちたて

まをり人必りし福也

○貞恕

大井氏弒前寂如賀の産後仁州大津ま  
注しと貞徳門人とあり。

許六曆代滑枕音傳り其母の元ハ貞徳

貞室貞恕と濟き貞恕不むりて後

ありと書りはりあり其母の元實子

譲りまし事山本西武遺書り事

字より略す

あまふし生い母を養ひて

聴句

五返くハ由り人々其の

通陽りいまりきりこの事

此句より大津のころ其母とて小名とてま

守武宗澄の事也とてこれとて事

流りしとこれれれとて此語ありと

公得る多しとこれの句

うけき母を福ぬとて啼や郭云

夕之やゆを首申りて大井川

之を其れ濟きと事一とて其れ名を

種よのとてし事其れ人の首と剣

の多ふ井一句の由言を失ふは後世との  
言はれも古くも理を承へて入

ふく後や二十に昔の草のん

三十九歳の元旦よ

きをたしめ伊達芝居の飛鳥月走

次のとくハ何ぞと云飛出はんと云く飛り  
ことまゝ久たも飛きと云

聴句

化て正あゝ踊ねはし

圃りよ草薙のまことこゝろ

羽はれゆく化りに圃踊りよまゝはね  
まこととまゝに飛りありこれと云

附と云ふあるは宇武宗鑑及貞徳

貞室の化といふも蕉風も多ふ言はて

まゝ飛りよまゝと云ふは早や

流り物申ははつ飛道に麻まき暗夜の

後行途を失飛り一級あるは

○宗因

嵯波ノ産後京西山ノ住人西公相ト云梅公箱  
ト云テ該林祖傳の祖あり

天満天神月次の連歌の宗因は

誹諧ノ遊人ト世ノ行てまゝ誹と

破して獨歩をたのはる人吟

宗因風と称す

獨吟



改訂了大活屠はさふ夕う籠

阿志美砂子純庭の涼風

海龍片月噴るまそそむあう

はあも移れしお徳と二月あ

は月丸のふもふき廿四丁の舞臺

まうらわとやむしのおん

遊遊うこのまうらてハホーハ

阿能山梅二花うこり

詠むとそむもふふ一二月の首

孫吟う一まふあうやまきう

後林十丁真巻尻

はまを家う一後林のあうの梅の氣

世俗賦うとけまんく久井

新成多むたこの桐り移れまう

はまうり後林の誹諧ちうしん門人

西鶴由平あといはとえと一太坂後林と

号ん

○將監

美濃ノ産忍田氏誹諧ノ名有ル今ナリ  
一とせ追清風とあうまう

み月あうり能く一そまはまはあう

と移れまきと

阿能山二梅二花うこり

と清風はりあう

此紅粉をばれや紅楓の袖おほ  
尾子母の風を握袖のそ道  
白雲やを踊きと人を信し

○松意

江守住人宗因を招き後うら  
後法林軒と号し

談林十百頁より軒智の獨活述の間  
誅書目より変化をあらわしに法林  
と号し此時一統より法林の誅  
極をけり

四獄くや呑身のあまを死後り

まねやむりとのひまは

そはの夜句并 聴句

雪は雨のひうハおぼふふと一鉄

病は終てまん屋きくも人う正友

くは終くや凡才トのト正ト尺

そは終く備くや一そは終幽山

心はおとく人申さん山は九る雪柴

雲は雲の白とれとや舟の角在色

宗因 錢別

夕まをしきわらの水月はこつま似春

そは終て終るふとまと一は終せよ

ゆふく旅人三伏のそ夏

そは終のそまきく一そは終

磯く川波のそまきく一そは終



五代ねりうはせり言性の神うる言

團々くくふまのふ本海

照句

親親をま申細云と此

合力も二森も紅ふもあうりまま

○弘氏

世州足代氏神職あり後林一  
らも月一と母のなきり

子親少を少多をけうきん

市佛入ともまはむるてもま

世う世林仍をまきりなまきり示流仍の

句のふらもけりまきり漢字のまはるん振

海仍多りけまきり時の人言飛う久長点の句を

系もはねも難はも府を合とまらり

や一そはれねねともうけまきり月と

誹諂滅亡の時神をありにま

そはのりけり

世瓜一三千の林橋教はまきり

とそあとも下戸多月山の死ハまき

夕暮やねまありこのまきり後上戸

今月の大おるり梓儀のまきり

うるされハ教をまきり

照句

遠處漢が小ね棒けりや

功成若遂鉄挺退く

面影の遊こむむし長ね

そははらぬ心とてしるは

んをいさくえとまきこめはま

はひりし子足目り西川

天通や人なや女三通や

こころあきハ信浅

教の子臨これあ人朝敵

隆志甲とある屋と

○ 信徳

京三吟

白蓮花の屋山の小は

とては名の文章名

飛句

梓のりり屋縁とこ

柿秋く温中た

春子空流の形

あえと飛ひ

正風作

るの目や門控

月夜やこを飛せ

年のさる女の月

○ 系堂

山口氏とて免事

信章とて免事

わさ那那淨瑠璃水噴く様其  
日住ます多田合志の三瀬川

十右 詠林

三夜鈴やまきりとねんを焚くの花  
角がふふ浮ぶ世まじ風信るる

碓とろ他乃名は 澤う那

十右 正風

蓮と堂一と庭裡一池あり世うま堂  
の十蓮とほふ秀逸の句十句と浮るるか  
あかり

○ 言水 治平住久池田氏此茶藤軒と傳

本枯の呆きありきり海のさる

此句より人思ふはあつりの言水と福を  
詠林より正風より早くら門をるる句  
あかりあかり

葵州うまきとくも牛の角

早て女の尻より文の尻う角

○ 鬼母貫 松州住丹の産花より云及  
撰集多し

正風より花と蕉風より歌より男に花れと  
蕉花の滅屋より梅より花と志るる事亦切し

花首の上と花小つ母尻の那

花よりと本は花を動かして秋のそ

母とく〜あや〜古後

きのほ秋〜山月〜あるそ〜  
きん〜

○才麻呂 推本氏松笠軒と浪花の住あり

こま〜も〜風〜逆飛〜あま〜思〜あ〜

減後〜公〜と〜あ〜切あり

月曉〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜

○立志

高井氏和諧堂とふ〜江戸の住和代の  
立志あり二代三代ともに立志あり

泣あや〜あ〜あ〜あ〜

矢のつ〜あ〜あ〜あ〜

○来山

小西氏海公母と呼浪花の住あり

初〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜

○仕口

伏見西山片ち

我家の佛〜あ〜あ〜

啼〜あ〜あ〜あ〜

○湖春

小村喜吟の家副之誹諧堂と云

際〜あ〜あ〜あ〜

大地の〜あ〜あ〜あ〜

○清風

奥州尾葉沢の住一松集の撰あり

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

○玄梅 南都の産落し佳人

天の川龍皇のこぼれし露あり

本陣の西渡舟のちりし海客川

○明水 廣井氏落し佳人

此常流のそとにけりしこゝ飛流

此名古とそとにけりしこゝ流

○一品 芳野氏落し佳人

深川を伏見に似たり梅の花

遠浦帰帆

枯草のちりし雪を月に入帆

○忠知 江戸の佳

○末 元日や何ぞぞ之 鶴居しけ

白山屋や寝惚むし此言の枝

信徳より末より志をせし八正風

流を遂一人とあり廿余二十

歌仙江戸八百と貞元を川星

こゝろし粟のちりし入るの誹士蕉翁と

世を同しせしと他ちりし

あまきしこゝろし



誹諧名家録卷下

○桃青

伊賀上野の産武石松尾甚七郎宗房妹の軒号  
入道は江都深川住人母は芭蕉公相称一本の  
芭蕉子竹庵植賜一三故ナリ

伊賀より阿市よりハコ流む一庵亦無名庵

今再建し一庵起す今伊賀上野より一庵波より

有るハ今龍庵今院取の侍一今今龍庵の庵と  
名七一好なり一今再建し

江州石山より阿りよりハ知住庵今義仲より

杖茶の遊のおうらハ三月の風日笠坊

ともむ飛経ひ一播州姫路の上陸一元禄七年  
風尾堂より

十月十二日難波の僑居した飛より後令

年五十二歳遺骸ハ江州粟津義仲寺

不埋其用後馬の記アリ  
家より略す  
一飛後名と出

流冠一撰集ハ桃青二十頁の一部あり  
奥の細道撰ありと之とも芳るを居成  
ありと一撰を以て戸八百頁と川星  
こゝろ一粟を以て日春流日と流外門人の  
撰あり

そのころ一時事吟の門下とてむく  
日く流流の初と白形を流林やも  
遊鳥流ひ

その流の吟

庭訓の住来誰かおもひの春

日喜雛人形天白との流らとや

水若く便流子唯とくとせり

歌句

小帯あり石院のくくく舞歌

流のやけき湯とろじ中

居人校おのみや唐くら

拙者有苗子ハ流林公流系

流不家園の流林吳凡とん流り正凡と

ちりや一卵恒の家集子美の詩集と流

止蓋牙り流冠を腸と探と流と心凡

招客の此翁、誹語中真の社と作く事

既一天下一編せり  
流冠一古人歌の桃青  
流今堂一田舎ス

二十歌仙江戸八百員八全く流林あり

流上月のくく一粟ハ流林の風調小

似のこも飛多のこも経あり志を記あり

後と兼保く草と草ふ若るん 飲水

此と後や二儀似々園のけ免云 主角

唐山二坂上四ハ二無の三三ありん 友吉

更科の丹ハ口角中も形くをきり

合員山の谷をわく一妻を夕をきり 公羽

寒と食の日旅人烟系く似はるん 藤白

外言卷啼く一清流氷系地をえれ 雷虫

軒の控極と控多く一えあふし 風を

二兼と後美女系と一けく控く

一形飛くくくく一飲押とをきし

世を際と外遊世の二の定めをきし

△ 野らりし記り 甲子記りとも

野らりしと句く此のしむる

道の世は木権ハ三ろく喰れきり

道く控子と憐む

後と夕人控ふく秋の風をふ

能くくくの清水

西池とくく一試く一浮世そくくを

和州行御の文あり 世時文里ととも 大津

千那高白玉月亜ホ世時門く一をきむ

こまの吟

唐橋の松きし兼く一控中く

大坂城の丹州口ホ公翁と括く一内よ入

△ 久々佳日 尾張五教仙と云ふ是あり

本指の身ハ牛ニ由リ似多ク

名石屋河今裁人 歸水斗里五 伊良右の

拙因亦能撰あり

歌句

口たりと二傷とちきりちきり程交

明ハハ歌一 首送り せん

小三大一 且とせ一月とるじ

△ 石川佳節 お徳の百真とも 句解百真とも 奈其六角撰あり

杉風 山嵐雪 其六角 山風蘭 曾良 又鱗

松下 不卜 仙化 松風 号随仕ス句々

家子歌ス

△ 歌々七十年のじ 松は 奈

尾指 初指 折馬 帽子 若るり危

△ 靴火田ニ歌化

桐葉 東 藤木 随仕ス 奈右リ 一六 後世

と之と 再 希 程 多ク 妙キニ 言 仙 あり

△ 春佳日 冬佳日 冷々 冬の日 佳撰あり

△ 何々野 荷 合の 撰あり

△ 虚栗 其 角の 撰あり

柀ハハ 靴も 一 巾 一 靴も 一 其 角

春も 一 巾 山 吹 白く 巨 若 一 奈 堂

星 合 一 靴 女 一 願 一 奈 堂 一 嵐 堂

浦子ハ 明ハ 一 圃の 弟 也 一 人 一 奈 堂

聴句

傘持志士一君の名をとふ

滝見一君の秋の髪をのぞく

舟渡り石の槌の音をよめる

人石風船くさねをのぞく

△ 後葉集

左末儿兆撰あり

此は一より一正風二下一編を著す

左末文竹ハ千那尚白とありもいふ

門下正々二事一松表常小足あり

△ 奥の細道

世時下野公守躬信丸正王加賀の北枝

が平ホ及びひる巻好三鐵の津土巻く門下とむ

△ 出羽五歌仙

勇健細道一濃れ多り二行仙あり花橋

ひさし出るとあり

的場のせん一鳴る山吹

春を待一七のとけ力ふ

△ 深川集

洒堂撰

洒堂を琢碩名を改一あり一はた

下り一集あり一極一深川集と云

ふらけの挑燈を光を影あり

はら一うゑは星川の橋

ら始正久とあるひとこも

△ ひさし 曲集正秀 琢碩本の撰あり

永年能中 野はくく 此記あり  
深川集まきく 此変化と云ふ 貞徳翁の  
古風より 流石の流りたるは 貞徳翁  
まきく 天下統一 統一 蕉翁の  
丹誠大く 此世道 不たふとの 此く  
此記あり

△浪化集 浪化撰 未校合

と云ふ 此あり 海の二冊あり

△兼好く 其角撰

△兼の玉路 口

△其体 風雪撰

△別在友 杉凡撰

△祝表紙 未定 蕉翁撰 此あり

傳来 此芳 亀毛也 茲今 烏明 今東都 松

△西路庵 秘蔵

△炭俵 野坡 利牛 孤屋撰

△清きり系 不卜撰 此季百 昔句合

判者 湖春 玄堂 信徳 公羽 此人あり

△虚栗 惟然撰

△葛の松系 支考撰

△一摺集 清風の撰あり

△三日月日記 是ハ公海 誠後

△赤表紙 未定 此あり 蕉翁撰 此あり

伊賀上野 雪芝の 縁今 此あり

△ 枯尾花 其角撰

江州粟津一 徳令の和氣と吊の二集之

二病申看福せ一門人

玄来 天竹 乙州 三道 注風竹と  
改在り 舎四羅

春舟 米節 医ナリ 惟然 前号  
天考  
次節之清

武角 生  
生  
生

世十一人乃之終ハ世道の冥加イ叶冠一

あり重一

○ 智月 乙州の母あり

○ 園女 伊勢ノ医一有リ妻

○ 露路川 名古屋東都一 下向ニテ門ニスム

○ 李子由 堅田ノ産落柿舎ニ詣ル

○ 浪化 終ニ相見セストイヘ  
作者ト称ニタマウナリ

○ 許六 彦根ニ藩中東武下向ノ時門ニスム  
深川集作者ナリ

○ 史邦 復篋集ノ作者ナリ

○ 路通 ○ 荷兮 ○ 塾水 ○ 越人

○ 木因 勤氣ヲ受タル門人ナリ

公羽滅後の撰集

△ 仏川をむり

△ 誹諧未由 其角撰  
誹諧奉行 玄来

公羽滅後次のと一此集あり師九原一

と一 道ニ慶多ク此方ハ門葉ノ恥辱

風骨と云々集一と一撰一

と一 心と云々一 一集あり

△續後集 沾国 里圃ノ撰あり

世一七社集と云ふと此中より取り入  
多きとも元禄十一年の序ありは  
元禄七年の院令あり何ぞ七社の  
なりやと云ふも小伝證と云ふ事  
六社中も八社中も若し云ふや

△嵯峨日記 玄未撰

△芭蕉庵小文庫 史邦撰

△笈小文庫 西徳川撰

△笈日記 支考撰

△句兄弟 其角撰

△千鳥影 法俊撰

△類林子 其角撰

△雲一多 其角撰

△韻塞 許六撰

△扁突 李由撰

△風俗文選 許六撰

△宇陀法師 口

△泊船集 風国撰

△芭蕉句選 口

△白扇集 園友撰

△陸奥千鳥 桃澤撰

△皮篋摺 園友撰

△湖東問答 玄未ノ言ヲアケル文ナリ



△ことと世牒 明史撰

△東管 露沾公撰

△二庭の巻 立派撰

△放鳥 朱拙撰

△本朝文碎 支考撰

△此外東花集 西花集 桃の首途

△藤の首途 干論 三足担 新百真 後十論

△古今抄 亦あまの撰集 支考ありありとて

△とも皆く一公の風調へ似てふるくも

△あはれふるゑの教いそあるも 風調へ入

△多りとはありとてふる一 本朝文碎ハ

△文をれを風調のさるりにうそをい支考

○撰ハ三日月日記 廿四の相系也 及日記一

○限りとてふる一

○蕉公羽門人多かる中

○公未 向井氏崎陽産後嵯峨に住く落榎舎ト  
呼ぶ後集ノ撰者ナリ

○文牒 大山藩中後嵯峨に住く蕉門ノ能書ナリ

○千那 大津ノ住僧ナリ

○杉風 江戸深川ノ住

○嵐蘭 井上家藩中松倉氏

○其角 晋子ト呼ぶ江戸ノ住室井氏蕉門判者ナリ  
虚栗撰者及ヒ撰集教多シ

○嵐雪 雪中庵トヨフ江戸ノ住撰者ナリ  
蕉門判者其伴撰者

○観水 一ツ星虚栗ノ比ノ作者ナリ

○工迪 日 ○藤白 日

○舉白 日 ○文鱗 日

○枳風 日 ○李子下 日

○仙化 日 ○尚白 江州大津住

○圭月 亞 日 ○如行 美濃大垣住

○二芥 日 ○山店 江戸住

○暮四 ○李里

○秋風 ○友吉

○知足 鳴海ノ驛千代倉氏息鉄叟  
千鳥影ヲ推ス

○加生 京三住人 ○千里 和州産野鴨記行  
一時蕉翁三陪行人

○一笑 加賀産 ○好春

○鞭石 ○春澄

○彫棠 ○晚山

○遠水 江戸三住 ○曲羽 琴 膳所藩中

○東順 其角ノ親ナリ ○荷兮 尾州名古屋藩中

○越人 名古屋住 ○野水 日

○路通 坂産 ○木因 美濃産

○杜国 三州伊良吉住 ○桐葉 尾州

○東藤 日 ○重五 日

○舟泉 日 ○且草 日

○九兆 京三住 ○知月 大津乙州母

○曾良 信州諏訪産蕉箱奥羽行御陪行  
此等三ヨイテ終余ス

○乙州 大津 ○史邦 芭蕉庵小文庫  
撰者

○洒堂 初ノ珍願ト呼フ  
美濃大垣産 ○不卜 ワキカ今撰友

○園女 勢州一医師一有力妻後江戸三住人  
蕉門判者ナリ

○木子由 江州堅田ノ住僧ナリ扁突庵者

○許六 彦根藩中本森川氏五九井トテヲ宇陀法師  
公貞室及ヒ撰集多シ

○木竹郎 大津ノ住一匠ナリ公孫後命ノ名即  
葉ヲアタメノ人ナリ

○土井 伊賀上野ノ住 ○後雖 日

○雪芝 日 ○卓信 日

○伏水 日 ○露川 名古屋ノ住  
月堂ヲ居士ト呼フ

○諷竹 初ノ之道トテ浪卷ノ住

○霞路 沼 奥州岩城城主内藤候ナリ末菅撰者

○支考 美濃国柳子庵ニ住ス若カリ時禪僧ナリテ遠俗ス  
見キ也トモ東花坊トモ西花坊トモ様々在来ス者ナリ

○惟然 初ノ赤牛ト呼フ由虚栗ノ撰者ナリ蕉翁減後昂クダ  
風疑念伴ト云テ作テ喚フヒトニ在僧ノ如クナリ

○舍羅 浪花住公孫後命ノ席草ヲ撰メ二人ナリ

○吞舟 日 ○沾徳 江戸住蕉門刊者

○木道寺 公孫生涯相見ナリト云ヘトモ木道寺ハ  
カレモノナリト称シ給シヨシ

○挑隣 陸奥千島撰者  
蕉門刊者 ○轍士

○卧高 ○探志

○冰苍 ○蟬吟 伊賀上野藤堂  
家ノ臣ナリ

○卜宅 ○探丸 蟬吟ノ息ナリ

○溪石 江戸住 ○依之

○夕蘭 ○清風 出羽尾花沢ノ住  
一橋集撰者

○一髪 ○白胤 尾州

○呂丸 出羽ノ産出羽五哥仙連多シト云ヘトモ  
専ラ司リシナリ

○不玉 出羽酒田ノ住 ○北枝 加州金沢ノ住

○浪化 越中井波ノ僧ト云ヘトモ山阿ノ海ノ  
撰者ナリ

○重行 出羽ノ産 ○配刀 イカ

○汶村

翁生前相見十下イ下ニ稱シ給イシ門人ナリ

○野童

○龜洞 尾州春日作者

○雨桐 尾州

○聽雪 日

○昌碧 日

○昌圭 日

○万字 伊賀

○近之 伊賀上野住

○園風 日

○祐甫 日

○風文 日

○普船 江戸住

○全峰 江戸住

○朱拙 豊後後産放島撰者

○幽泉 日

○野坡 浪蒼住炭俵撰者

○孤屋 浪蒼住上日

○利牛 日

○傘下

○羽笠 尾州

○冬文 日

○蚊足

○如泉

○似船

○泥足

○鈍可 尾州

○游力

○路徒

○沾蓬

○吾中 京住

○龙次 名吉屋住

○二水

○竹戸 美濃住

○式之 伊賀上野住

○良品 日

○羊残 日

○東来 日

○胡及

○松吾

○晨風 尾州可成撰者

○一井 日

○鷓步 美濃坂阜住

○長虹

尾州アヲノ集作者

○釣雪 上日

○水固 イカ

○羽紅 女撰集作者

○子珊

○塵文

尾州  
春白作者

○破笠

江戸住

○浚似

津島住

○友五

尾州

○一桐

イカ

○槐市

日

○已百

三ノ

○千川

○野徑

○魯所

長サキ

○及肩

セ、

○湍水

ヨリ

○卜枝

日

○斜嶺

三ノ

○此筋

○闇指

三ノ

○沼圃

江戸空井氏  
後井三ノ作者

○里圃

上ノ

○馬菟

○冬松

ヨリ

○李子風

日

○古梵

叙

○山川

江戸

○神叔

江戸住

○若風

三ノ七ノ住

○裾道

セ、

○乃竜

○匂空

カ、

○李子雨

ヨリ  
アラノ集作者

○心芮

上ノ

○里東

セ、

○桃妖

カ、  
山中住

○車庸

○涼菟

伊勢方神風  
鏡園友弁トヨヲ  
撰集多

○野明

カノ住

○怨誰

セ、

○耕雪

三ノ

○支梁

○水札

フエノカサキ

○呂風

致中

○畦止

浪卷

○不角

江戸  
法眼トヨヲ

○沼荷

○乙由

イセ住  
麦林トヨヲ

○松芳

ヨリ

○利合

○一桐 一カ ○角上

○專吟 秋氏 ○風瀑

○山風竹 江戸 ○山翁 此翁江戸に生る

○亀翁 岩翁巻ナリ ○秋色 江戸人

○申七 十カサキ左末 川下ニ生ユ ○風国

○酒 此翁江戸に生る

○酒 此翁江戸に生る

○酒 此翁江戸に生る

○酒 此翁江戸に生る

○酒 此翁江戸に生る

○酒 此翁江戸に生る

○酒 此翁江戸に生る

守武宗鑑のいふこと移りし

貞徳老人を既す一草の元は仰と

多し一草を日く此流は徳林の邪治

す天下の強人一統せ蕉翁初

心風の定と流るる決断す亦

一統せ一草名家録の録す

を徳波及一道聖人形の中を

已と多し人と此翁人甚す隠居に

あつたまき一草保世二万のこもり

徳林のいふこと信す二作三作の

ゆきまふを流す一草の翁人峯家も

三門良士一明和のそとを形す

二三子の多れりま至人詠く蕉門の  
志意を深し探りて世より徳く  
ゆきゆく元祿の香風一吹之風乃  
我が世申信きりる風うれをいふ  
事と吾春秋菴の三人の書を採ふ

自十時寛政十<sup>年</sup>辛冬霜月白央廬之門

平方正徳の

